



探訪 長門のいしおみ ④9

偈文を刻んだ

盤石橋の桁石

深川湯本・太寧寺（県指定史跡）の盤石橋は、かつては岩国の錦帯橋、山口にあった虹橋と並ぶ「防長三奇橋」の一つであった。長さ14メートル余の小橋であるが、自然石を組み合わせた造形はすばらしく、橋梁建築史上の価値も高いといわれている。

この橋には、古くから「経文」が刻まれているとの伝承があったが、桁石を覆ったコケやカズラなどが障害となり、その内容を知ることができなかった。

昭和47年、当時の長門市郷土文化研究会会長・羽仁雅助氏（故人）は、桁石側面（下流側）の刻字を採拓、その全文を明らかにされた。



桁石偈文の一部 ▶

た。刻まれていたのは偈文であった。

「偈」とは、詩句の形式で仏徳を讃嘆し教理を述べたものであるが、この偈文（漢文体）を読み下すと、つぎのようになる。

偈文

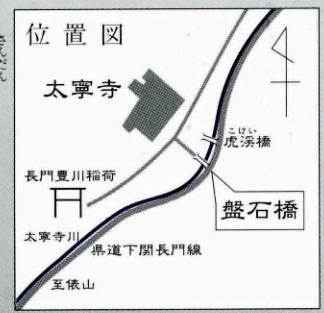
山を穿ち石を拽きて磴橋新たなり。衆流を截断し世塵を絶す。挙著す、趙州昔時の話。鱸を度し馬を度し迷津を度す。

偈文の大意

山を掘り石を運んで、新しい橋をかけた。この橋は煩惱を断ち、世俗のけがれも断ちきる。これによって、趙州禅師にちなむ公案（参禅者に出す課題）が実現しよう。橋は口バも渡し、ウマも渡し、それに、迷っている一切の生命あるものを渡すのである。

また、併刻されている銘文によれば、最初の架橋は燈外和尚（24世）の代の寛文8年（1668）で、宝暦14年（1764）、呑海和尚（34世）のときに再建した、とある。末尾に、架橋に携わった副寺（会計係）、典座（食事係）、兼直歳（工作係）らの名も見える。

（寄稿）長門市郷土文化研究会



こちら 119
できますか？ 応急手当

突然の事故が目の前で発生した時、あなたは何かができますか？呼吸が止まってから脳が生きていられる時間は3~4分と言われています。救急車が来るまで何もしないで待っているのは助かる命も助かりません。いざという時、愛する人を救えるよう応急手当を身に付けましょう。

消防署では、心肺蘇生法を中心とした普通救命講習や、さらに高度な上級救命講習を実施しています。職場、地域、グループ単位でお気軽に消防署までお申し込み下さい。



9月9日は救急の日

長門地区消防本部・中央消防署 22-0119
火災時の問い合わせ 22-1414